



曾我 豪 (編集委員)

前から一度、きちんと話を聞いてみたかった。長島昭久氏、52歳。民主党をリベラル政党とくれば明らかに少数派の、自他ともに認める保守の論客である。

集团的自衛権についての最近の彼のツイッターを読めば一目瞭然だ。

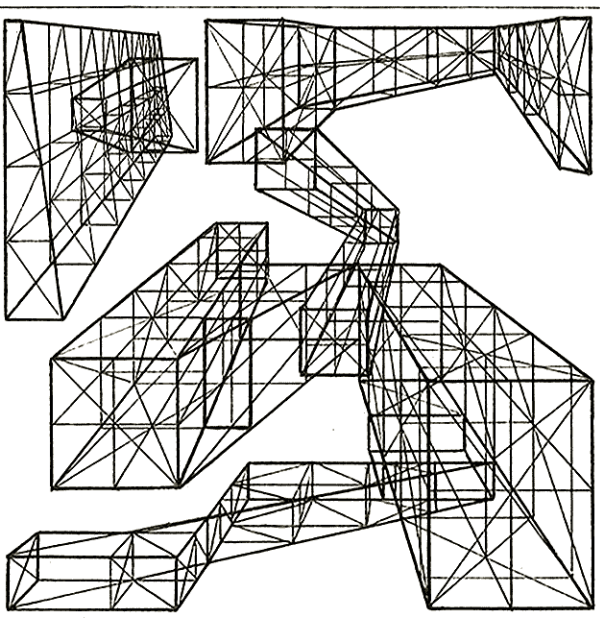
まずは「個別的なら何でもありで、集团的はダメ」というのは、幼稚で破綻した危険な議論」（3月24日）と言いつつ、自民党で高村正彦副総裁の「限定容認」論が浮上すれば「実に穏当な内容だ。民主党内の議論にも十分耐え得る」（28日）と間髪入れず歩調を合わせる。

——身内の多数派に合わせる風もなく、さりとて外に飛び出るわけでもない。孤塁を守って発信と行動を続けるのは、どのような思いからなのですか？

「安倍政権が右傾化すれば、対峙する野党は左傾化する。それはおかしい。かえって現実の歯止めを失う。それより、現実主義的に別の選択肢や代替案を示すほうがよほど強い。一強体制に居心地の悪さを感じている多くの国民も、野党にそれを望んでいるのではないでしょうか」

「特定秘密保護法もそうでした。秘密と聞けば、条件反射的に何でも反対というのはおかしい。だから、秘密の必要性は一定程度認めたくなくて、何ができて何ができないかを、政党間協議で詰めていこうと考えた。政府原案の修正が不十分なまま採決強行され私も反対に回りましたが、集团的自衛権の問題はこれからです。具体的な歯止めの姿を十分に示せれば必ず、民主党はじめ野党の多くが納得できる合意点はある。私は自分が少数派だとは思っていません」

この春は、戦後の政党政治史の大きな分岐点である。20年ほど前のPKO（国連平和維持活動）協力法も、10年前の有事法制



絵・野又 穂

## 両極化より合意探る「統合」を

### 政党の役割

関連法も、政党間協議の成否が日本の安全保障のあり方を変える法の命運を握った。前者は公明、民社の中道政党が、後者は野党第一党の民主党が、それぞれ政権党の自民党との間で合意に達したが、それはいずれも国会承認や国民保護法制といった歯止め策を施す修正があつてこそ話だった。

——その歴史を繰り返せませうか？

「個別と集団の別なく、ときの内閣が国際情勢や軍事技術の進歩などを勘案しつつ適切な憲法解釈を施して自衛権を行使するのは当然のことで、その方向性を閣議決定の形で示すのも筋の通った話です。ただ、大事なものはその先。日本の場合は、現実的に自衛隊が活動できる範囲を自衛隊法や周辺事態法で列挙している。いくら内閣が憲法解釈を変更しても、私たち立法府が個別法を改正しなければ自衛隊は活動できない」

「今こそ必要なのは安全保障の基本法です。憲法と個別法の隙間を埋める基本法の整備を怠ってきたことがおかしかった。内閣法制局に憲法解釈を任せ、あるいは引張られるのでなくて逆に、主体的に立法府が内閣の解釈を制約できる具体的な方策を編み出す時代に入った。主権者である国民に直接選ばれた私たち国会議員と政党が、もっともパワフルに憲法の有権解釈を表現できる方法が基本法だと思ふのです」

ほのかに決着点が見えてきた気もするが、もちろん、彼の意見通り、超党派議連が野党案をまとめ、政権党から譲歩を引き出せるか、成否はまだわからない。ただ、その問題提起の意義は極めて重い。そもそも政党は何のために存するか、根本を問い直すものだからだ。

議会制民主主義に立つこの国で、錯綜する民意をくみ取り、関係者の利害を調整して施策を進める統合の機能は、基本的に政党にしかない。政局的な対立より政策的な合意を優先してその統合機能を發揮したのはたとえば、民主党の野田佳彦政権末期の消費増税についての民自公3党の合意だろう。逆に發揮できなかったのは、採決強行で野党を離反させ自公与党だけの賛成に終わった特定秘密保護法である。

「個人的に、集团的自衛権の問題は、政局にすべきでないテーマだと思います。ただ、民主党内の声を聞き、メディアの論調を読んでいても、戦前の反省に立った戦後日本の国のあり方が大きく変わってしまいかねないとの不安がある。多くの政治家が良心の葛藤を抱えているのも間違いない。それでも、だからこそ、政府が右に行くならこちらは左だではダメだ。不安を除去するためにも、多くの政党の合意で歯止めをかける本来の責務を果たすしかない」

言うまでもなく、左右両極化の弊は我々メディアにもある。

新聞も雑誌も、論調が二極分解し、人々が自分の好みに合わせて選び取るだけでは、国論が二分する課題を解きほぐすことができるだろうか。時に主張の極端な部分だけが対立し、現実へのリアルな解が見えなくなってしまう。

この春からしばらく、そもそも政党の存在意義は何かをこのページで考えていこうと考えている。それでこの稿も起こしたのだが、それはとりもなおさず、朝日新聞の政治記者としての自分の本来業務を考え直す仕事になると思い至った。